

『東海佛教』 第四十二輯 抜刷

平成九年三月

東海印度学仏教学会

『十王讚歎鈔』 系諸本と六道十王図

鷹 巢 純

# 『十王讚歎鈔』系諸本と六道十王図

鷹巢 純

## はじめに

中世から近世にかけて、日本は仏教における死後世界観を継続的に改変してきた。自己の世界観と外来の世界観とを調和させるためになされた、そうした一連の動きをたどろうとするとき、六道十王図<sup>1</sup>は極めてよいサンプルとなるだろう。というのもこの六道十王図は、中世から近世にかけてある程度まとまった量の作品が残っており、かつ六道十思想や十王思想を媒介として当時の日本人の精神を取り巻くさまざまな状況がそこに投影されているからである。私はこれまで主に特定の図像や副次的なテキストを通してこの問題に取り組んできたが、本論では六道十王図の展開と極めて密接な相互関係をもつと思われる三つのテキスト、『十王讚歎鈔』<sup>2</sup>、『十王本跡讚嘆

修善鈔<sup>3</sup>（略称『十王讚嘆修善鈔』、以下略称を用いる）『十王讚嘆修善鈔図繪』<sup>4</sup>を中心に考えてみたい。これら三つは六道十王図の発想に正面から取り組んだテキストであり、かつ相互に極めて密接な関係を示す。しかもそれらは鎌倉時代、室町時代、江戸時代と、いずれもそれぞれ成立した時期を異にしており、六道十王図をめぐる発想の歴史的展開を考えるにも適している。したがってこれらを比較考察することによって、テキストの側からも六道十王図の展開史が、ある程度追えるに違いない。

## 第一章 テキストの概要

### 第一節 『十王讚歎鈔』

本論でとりあげる三つのテキストのうち最も早くに成立したのは『十王讚歎鈔』であるが、日蓮撰述の伝承を

もつこのテキストは建長六年（一二五四）の年記のある写本が三宝寺に伝存している。そのおよその構成は以下のとおりである。

- ◆は『地藏菩薩発心因縁十王経』にない内容
- ◆序文（十王の存在意義）
- 2 秦広王（◆断末の苦しみ／◆中有の旅／◆極善極悪に中有なし／死出の山／秦広王）
- 3 初江王（三途河／衣領樹と二鬼／◆中有の諸帝／初江王／◆壇茶幢）
- 4 宗帝王（◆業関／宗帝王／◆俱生神）
- 5 五官王（◆業江／五官王／業秤）
- 6 閻魔王（閻魔王／壇茶幢／光明院／俱生神／浄頗梨鏡）
- 7 变成王（◆鉄丸処／变成王／◆双木の本の三辻／◆二四孝による孝養の勧め）
- 8 泰山王（◆閻鉄処／泰山王／◆六の鳥居）
- 9 平等王（◆鉄氷山／平等王／◆親の恩／◆報恩経の勧め）
- 10 都弔王（都弔王／◆光明箱）
- 11 五道転輪王（五道転輪王／◆地獄の構成／◆等活地獄／◆無間地獄）

『十王讚歎鈔』が二大十王経典である『預修十王生七経』と『地藏菩薩発心因縁十王経』とのいずれに基づいたかについてはテキスト自体が直接明言することはないが、構成や個々のモティーフを検討するなら『地藏菩薩発心因縁十王経』と共通する内容が豊富に確認できる。たとえば断末の苦しみに始まり十王の諸王序を順次描写してゆく構想は『預修十王生七経』にはない『地藏菩薩発心因縁十王経』のものである。死出の山・三途河それに衣領樹と二鬼・業秤・壇茶幢・光明院・俱生神そして浄頗梨鏡といった主要なモティーフはいずれも『地藏菩薩発心因縁十王経』と共通し、しかもこのうち死出の山・衣領樹と二鬼・壇茶幢・光明院・俱生神は『預修十王生七経』にないモティーフである。こうしてみるなら『十王讚歎鈔』が『地藏菩薩発心因縁十王経』に基づいて著述されたものであることは明らかであろう。

しかし一方で『十王讚歎鈔』は『地藏菩薩発心因縁十王経』の記述に以下のようにさまざまな改変を加えている。まず両者の共通するモティーフにおける呼称の変更、モティーフの重複<sup>6</sup>など、その記述には継承の際の混乱<sup>5</sup>がうかがえる。また、十王の王宮をめぐる過程の地理情報も大幅に増補される。そして記述におけるさらに重要な

変更事項は、『地藏菩薩発心因縁十王経』では語られなかった地獄に関する記述が、十王についての記述の後に付け加えられているということである。

## 第二節 『十王讚嘆修善鈔』

比叡山で顕密二教を修め、後に浄土宗に移った僧侶・隆堯によって『十王讚嘆修善鈔』が撰述されたのは、彼自身の跋文によれば『十王讚歎鈔』からおおよそ二百年が経過した永享五年（一四三三）である。この跋文によればさらに、現存する『十王讚嘆修善鈔』は応永二五年（一四一八）の旧本に、語句の添削あるいは経論・伝記などの文言の引用を加えたものを、一四三三年に写し改めたものであるという。その内容構成は以下のとおりである。

### ◆は『十王讚歎鈔』にない内容

#### ◆隆堯による序文

#### 1 序文（十王の存在意義）

#### 2 秦広王（断末の苦しみ／中有の旅／極善極悪に中

有なし／死出の山／秦広王／真言宗と念

仏の称揚／◆秦広王と真言宗・浄土宗と

の關係／◆真言法と念仏法の有効性

#### 3 初江王（三途河／衣領樹と二鬼／中有の諸帝／初

江王／壇茶幢／湿木に火を求む譬／◆跋  
人と船の譬／◆網に懸れる鳥の譬

4 宗帝王（業閻／宗帝王／俱生神／◆本地仏文殊）

5 五官王（恒江／五官王／業の斤／◆唱名懺悔の勧

め／◆本地仏普賢

6 閻魔王（閻魔王／壇茶幢／光明院／俱生神／淨頗

梨鏡／◆本地仏地藏

7 变成王（鉄丸処／变成王／双木の本の三辻／二四

孝による孝養の勧め／◆本地仏弥勒

8 泰山王（閻鉄処／泰山王／◆本地仏薬師／六の鳥

居）

9 平等王（鉄氷山／平等王／親の恩／報恩経の勧め

／◆本地仏観音の利益

10 都市王（都市王／光明箱／◆本地勢至／◆法然伝

／◆浄土宗の趣旨

11 五道転輪王（五道転輪王／地獄の構成／等活地獄

／無間地獄

◆阿弥陀来迎（法蔵菩薩の四八大願／雄俊説話／念

仏行者への来迎／極楽の情景）

◆跋文

内容的には『十王讚歎鈔』の増補であり、『十王讚歎鈔』

にみられた文章は少し変更されるもののほぼ全文が転用され、その文章の言い回しの細部に至るまで極めて忠実にぞらえる。そのうえで、『十王讚嘆修善鈔』では以下の内容が主な追加点として新たに挿入される。

まず、十王それぞれの本地仏に関する詳細な記述。ちなみにここでの本地仏はおおよそ『地藏菩薩發心因縁十王經』と一致するが、九番目の都市王の本地仏を阿閼如来ではなく勢至菩薩とする点が異なる。八番目の本地仏が観音菩薩で十番目の本地仏が阿彌陀如来であるので、この変更は明らかに阿彌陀三尊を意識してのものと思われる。そして豊富に盛り込まれた、浄土宗のプロパガンダと言ってよい記述。増補された比喩譚はいずれもこれに属するが、何より都市王の本地仏として勢至に言及したことをきっかけに、勢至の化身と信仰される法然の一代記へ、さらに彼の主張した浄土宗の趣旨に関する長大な解説へと、連想形式を用いて次々に話題をスライドさせてゆくくだりの雄弁振りは圧巻である。しかし『十王讚嘆修善鈔』における追加点として本論で最も重視されるべきは、末尾にみられる阿彌陀来迎に関する一連の記述であろう。

### 第三節 『十王讚嘆修善鈔図絵』

三つ目のテキストである『十王讚嘆修善鈔図絵』が作られたのは江戸時代も既に末期と言ってよい嘉永三年（一八五〇）である。隆堯撰述・徹外増訂と標記されているとおり、内容は『十王讚嘆修善鈔』のテキストをそのまま用い、これに説話を増補し、木版による挿絵が加えられたものである。増訂をおこなった徹外は跋文に「龍谷釈徹外和南」と名乗っており、浄土真宗の僧侶と思われる。内容は以下のとおりである。

◆は『十王讚嘆修善鈔』にない内容／◇は『十王讚嘆修善鈔』と順序の異なる部分

0 隆堯による序文

1 序文（十王の存在意義）

◆ 『地藏菩薩發心因縁十王經』の由来

◆ 孝養の勧め（同／金棺出現／沈季詮説話／解除中じよの由来／射的の譬／心の鏡）

◆ 地獄の実在（地獄の釜の作者／郭巨説話／惡道と慈悲）

2 秦広王（断末の苦しみ／中有の旅／極善極悪に中

有なし／死出の山／秦広王／真言宗と念

仏の称揚／秦広王と真言宗・浄土宗との

- 関係／真言法と念仏法の有効性)
- 3 初江王 (◆浄土見聞集の引用／◇業閔／初江王／壇茶幢／◇衣領樹と二鬼／◇中有の諸帝／◆慚愧／◆楊震説話／◆羅城門の鬼／湿木に火を求む譬／跛人と船の譬／◆念仏門の優位／網に懸れる鳥の譬)
- 4 宗帝王 (◇三途川／宗帝王／俱生神／本地仏文殊／◆耿伏生母説話／◆筆生趙娘説話／◆美濃国百姓母説話／◆阿弥陀弘誓の船)
- 5 五官王 (恒江／五官王／業秤／唱名懺悔の勧め／本地仏普賢／◆宝蓮香比丘尼説話／◆河南妻説話／◆季生妻説話)
- 6 閻魔王 (閻魔王／壇茶幢／光明院／俱生神／浄頗利鏡／本地仏地藏)
- 7 变成王 (鉄丸処／变成王／双木の本の三辻／二四孝による孝養の勧め／本地仏弥勒)
- 8 泰山王 (閻鉄処／泰山王／本地仏薬師／六の鳥居／◆豊城村民説話)
- 9 平等王 (鉄水山／平等王／親の恩／報恩経の勧め／本地仏観音の利益)
- 10 都市王 (都市王／光明箱／本地勢至／法然伝／浄土宗の趣旨)

- 11 五道転輪王 (五道転輪王／◆魂宿樹／地獄の構成／等活地獄／無間地獄／◆浄土見聞集の引用)
- 12 阿弥陀来迎 (法蔵菩薩の四八大願／雄俊説話／念仏行者への来迎／極楽の情景)
- ◆ 徹外による跋文

#### 第四節 テクストにあらわれた宗門観

以上みてきたように、これら三つのテクストはそれぞれ宗派の異なる環境で作られているが、これらのテクストが宗派性を越えて比較し得るものかどうか、検討しておくべきだろう。そこで全テクストを通覧してみるならば、宗派性を読み取り得る部分が比較的限定されていることに気づく。例えば『十王讃歎鈔』では初江王(壇茶幢)のくだりの末尾近くに、

「されば懇ろに種種の法門を説て万差の機を調へ、終に出世の本懐の法華経を説給て化一切衆生皆令人仏道なし給き。構構此理を思ひ、成仏得道を期せんと思はば、時国相応の妙法の唱へをなし、以信得入し給べし。而るに信心疎かにして、三途に墮して重苦を受ん時悔るとも益なかるべし」(一九七三頁)

と『法華経』を仏教の根本經典として位置づける、いか

にも日蓮宗らしい一文を見ることが出来る。もちろん『法華経』を特に重要視する姿勢は、強度の差こそあれ他の宗派においてもほぼ共通するが、『十王讚嘆修善鈔』の同じ箇所は以下のように異なる記述をみせる。

「さしも懇に種々の法門を説、万差の機根に当置給へるぞかし、其をば更に余所に見て徒に止なん事の浅増さよ」  
(上一二オ)

ここでは『法華経』に関する文言は見られず、その位置にはより一般的な警句が置かれている。そして『十王讚嘆修善鈔図絵』のこの箇所も同様に法華経については触れず、ほぼ『十王讚嘆修善鈔』の表現を踏襲する。『地藏菩薩発心因縁十王経』に『法華経』と結び付く要素はほとんどなく、したがってこの部分にみられるやや唐突な『法華経』に関する文言は『十王讚歎鈔』が原テクストを増補した部分とみてよからう。このことは先に注(8)で触れた本地仏に関する問題と同一の傾向である。

一方で『十王讚嘆修善鈔』は撰述者の所属する宗派が浄土宗であっただけに浄土宗や法然を称揚する部分をか

にも真言上乘の法門は父母所生の肉身を改ずして速かに大覺の位に至ると云へり。」(上四ウ)

こうした真言宗への一種の敬意は、さらに秦広王(秦広王と真言宗・浄土宗との関係)のくだりに

「実や此王は本地不動明王大日如来の教令輪身にて御せば真宗共に其益を沙汰し給も理也。其故は先ず密宗は彼の尊の本宗なれば申に及ず。次に浄土宗に於て親き謂御す。其を何と申すに大日如来不動と現じ不動秦広王と成り給ふ。弥陀は又大日如来の五智の中には妙觀察智を司る。されば大日如来若し説法利生に赴給ふときは必ず弥陀と成給ふが故に此王も本地誓約に報て此両宗を勧給かと覺たり。」(上五ウ)

とあるように『十王讚嘆修善鈔』に一貫してみられる。そしてこの傾向はまったくそのまま『図絵』に受け継がれてゆく。

重要なことは、宗門に対するこうした扱いの違いにもかかわらず、これら三つのテクストが共通の原テクストに基づいているということだろう。この三つのテクストをみると、宗門を越えて原テクストが承認され、増補部分が受け継がれて行く過程をみる事ができる。したがって、すべてのテクストに共通の部分や、宗派を越えて受け継がれた増補部分は、日本人が共通して受け入れ

ていた認識であると言つてよいだろう。

## 第二章 六道十王図の展開との関連

### 第一節 説話の充実

ではこの共通認識のうちにみられる六道思想あるいは十王思想にはどのような傾向があるだろうか。そこでまず気づくのは説話的要素の充実ということである。その主題を列挙すれば以下のようになる。

『十王讚歎鈔』に引用された説話

1 孟宗、雪中に笋を得る 2 王祥、水中の魚を得る 3 丁蘭、母の木像に仕える 4 張敷、扇を身に添う

『十王讚嘆修善鈔』で増補された説話

1 叔雄、父のために江に身を投ず(『十王讚嘆修善鈔図繪』で再削除) 2 董永、身を売って父を葬る 3 楊威、虎の害を免る 4 法然の生涯 5 雄俊、墮地獄を免る

『十王讚嘆修善鈔図繪』でさらに増補された説話

1 釈迦、父の棺を担う 2 金棺より釈迦三身を現す 3 唐の沈季詮争わず 4 孔子、道を行方を射に諭う 5 地獄の釜の作者 6 郭巨、金の釜を掘り出す 7 漢の楊震、黄金を受けず 8 羅生門の鬼 9 隋の耿伏生の母、猪に

転生す 10 長安の筆生趙の娘、羊に転生す 11 美濃国の百姓の母、雉に転生す 12 宝蓮香比丘尼、女根より火を生ず 13 隋の河南の人妻、犬頭となる 14 宋の季生の妻、狗に変ず 15 董永(大幅増補) 16 宋の豊城の民、虎に食わる

これらの説話はいずれも『地藏菩薩発心因縁十王経』にはみられなかったが、このように列挙してみると『十王讚歎鈔』以降、加速度的に数を増して引用されるようになったことが確認できる。これらの説話のうち、個別に検討を要する特殊な性格の「法然の生涯」「雄俊、墮地獄を免る」「地獄の釜の作者」の三点を除外すると、引用された説話は、大きく二つのグループに分けることができよう。すなわちその第一は廿四孝のモチーフをはじめとした、親への孝行を扱った説話のグループであり、そして第二は悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループである。

そしてこのような性質の説話を引用する傾向は、実は六道十王図にもみられる。親への孝行を扱った説話のグループとしては、一六世紀に制作されたと推定される出光美術館本六道絵に廿四孝に取材した三つの説話が確認できる。全六幅からなるこの作品の第六幅は天道・人



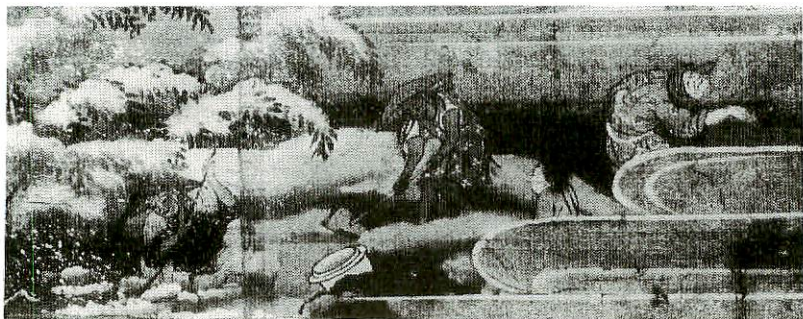


図1 出光美術館本六道絵第6幅部分 孟宗・郭巨・老萊子

道・畜生道からなり、その最下辺に左から、母のために雪の中でタケノコを探す「孟宗」、親の食いぶちを確保するために息子を埋める穴を掘る「郭巨」<sup>(1)</sup>、親に老いを悟らせまいと子供のみをしてお手玉をする「老萊子」が横一列に並んで描かれる(図一)。一方で悪業と結び付いた人間の転生を扱った説話のグループとしては、一三世紀後半の極楽寺本六道絵が『法苑珠林』や『三宝感応要略録』に基づく説話を少なくとも五種類圖像化している<sup>(2)</sup>。

さらに六道十王図では、目連救母説話にまつわる図像が頻繁に描かれる<sup>(3)</sup>。目連救母説話は悪道に堕ちた母を目連が救済することを主題とした説話で、親への孝行を扱った仏教説話のなかでも最も名高いものの一つであると同時に、目連の母が悪道を次々と生まれ変わってゆくという点で、人間の転生を扱った説話でもある。テクストに増補されていた説話の二つのグループの特徴を合わせ持つこの説話を、六道十王図が好んで採り上げていたということは、『十王讚歎鈔』をはじめとする三つのテクストと六道十王図との間に共通した発想があったこととの証左となろう。その発想とは一つには死後世界観を支える倫理基準としての孝行の奨励であり、もう一つは転生する世界としての六道観である。こうした発想に基

づく転生をあつかつた図像は、以下で明らかになるように、六道十王図において重要な役割を果たしている。

## 第二節 太山王の変質

『十王讚歎鈔』をはじめとする三つのテキストをつぶさに検討すると、太山王が変質してゆく過程も読み取ることができ、『十王讚歎鈔』の泰山王（六の鳥居）のくだりには次の一節がある。

「此故に泰山王の御前に六の鳥居あり。即地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に趣く門也。」（一九八六頁）

すなわち、太山王の管轄下に六の鳥居という施設が新たに設けられており、この鳥居が六道のそれぞれへの入り口の役割を果たしているというのである。しかも、テキストはさらに次のように続く。

「此王委く罪人の生処を定め給へば、諸の罪人等画面の生処に趣くなり。」（一九八六頁）

このように太山王が亡者の転生する先を最終的に決定するととなると、彼の後に控えた三人の王の存在が意味を失ってしまう可能性すらある。さらに続いて、

「此鳥居を出れば、地獄に入べきは即地獄におち、餓鬼は餓鬼の域に至る、余の道も又如此。是断罪の庭、一切

の罪人の浮ぶ境也。若跡の追善懃ろなれば、悪処の果転じて善処に生をうく。是故に四十九日のとぶらい懃るに當むべし。」（一九八六頁）

とあることから、六の鳥居を新たに加えた意味は四九日を強調することにあつたとみてよい。『十王讚嘆修善鈔』も『十王讚嘆修善鈔図絵』も、六の鳥居に関しては『十王讚歎鈔』の文章をほぼそのまま引き継ぐ。それらのテキストに定着したように転生先の最終決定者として太山王を位置づけることは、五道転輪王がもっていた特質を太山王へ移し替え、十王を第七王まで一旦完結させるという事を意味している。そしてテキストにおける太山王の機能の変質に対応して、室町時代以降の六道十王図や十王図にも、同様の方向に意味を発展させつつある作例を確認することができる。

その一例としては浄福寺本十王図<sup>15</sup>が挙げられる。浄福寺本の太山王幅（図2）には太山王の手前で首かせを外されようとしている亡者の姿があるが、他の幅にはみられないこの図像は、太山王のもとで今まさに十王によるすべての裁判が終了したことを示しているとみてよい。実際、十王による審理が終了した結果として、太山王幅にはさらに六道の各処への転生のモチーフも描き出される。例えば太山王の左脇には鳥居が二基描かれている



図2 浄福寺本十王図太山王幅部分

が、そのうちの一基にそこをくぐって昇天する女性(16)が添えられていることから、これらの鳥居は六の鳥居を表現したのもみてよいだろう。またその下部にはさらに犬の毛皮をかぶせられる亡者も描かれるが、この亡者は両腕と胸部をのぞけばすでにほとんど犬と化しており、今まさに畜生道に落とされようとしている姿であると知れる。こうした転生のモチーフが太山王の面前に置かれるということ、とりもなおさず太山王がそうした転生に関する最終決定者であることを示しているよう。そして当の太山王は浄福寺本の十王の中で唯一甲冑を身につけているが、この甲冑を身につけるとい特徴は、敦煌で発見された十王経図巻などでは五道転輪王の特徴として表現されていたものである。そこにみられた五道転輪王を甲冑姿で描くという伝統は鎌倉時代に書写された東寺本『預修十王生七経』(17)にも継承されているので日本に伝播していたことは間違いなく、この系譜を受けて浄福寺本の太山王が転生先の最終決定者である五道転輪王の特徴をすっかり自分のものにするために甲冑姿をとったのではないかという推定が成り立つ。そしてそれはおそれなく、六の鳥居を太山王のもとに置いた『十王讚歎鈔』をはじめとするテクストと共通の発想に基づいてなされたこととみるべきだろう。

『十王讚歎鈔』系諸本と六道十王図（鷹 巢）

そしてこの発想は六道十王図の以後の展開にも影を落とす。例えば江戸時代の作例である明長寺本十王図(18)では、太山王幅に釘抜き念仏の情景が描かれる。この釘抜き念仏とは『釘抜き念仏和讃』によれば、毎日、供養の念仏を唱えることにより、地獄において悪業のために四九本の釘を打たれた亡者の体から一本ずつ釘が抜け、すべての釘が抜け落ちた四九日目にその亡者の極楽往生が叶うとされる民俗信仰である。この釘抜き念仏にみられる太山王の四九日目で亡者の最終的な身の振り方が決定されるという発想は、『十王讚歎鈔』をはじめとするテクストと共通のものである。そのうえさらに興味深いのは、人間が死後、地獄を通過して極楽へ至るとい、釘抜き念仏が示している死後の一連の過程だろう。次節で明らかとなるように、実はこうした過程も『十王讚歎鈔』をはじめとするテクストと六道十王図とが共通して進展させてきた構想なのである。

### 第三節 極楽の付与

『地藏菩薩発心因縁十王経』にみられる構成は、人間の死後、死天山の道行きから説き起こし、十王の裁きを順次記述し、最後には迷妄を解くために釈迦が説法して終わるというものだった。これに対し、『十王讚歎鈔』

では十王を順次めぐる間の地理的な情報がかなり増補され、十王に関する記述を終えた後で、五道転輪王に地獄の構成および等活地獄と無間地獄に関する詳しい解説をさせている。このように『十王讚歎鈔』では『地藏菩薩發心因縁十王経』にみられた釈迦による説法という枠組みは既に取り払われ、構成の主眼が死後の道行きを疑似体験させる方向に向かっていることが確認できる。そしてこの道行きに地獄を加えたこと、しかも等活地獄と無間地獄という八大地獄の第一と第八を詳しく描写し、地獄道を下って行く趣を加えたことは、六道十王図の基本構造との深いかかわりを示しているのである。

『十王讚嘆修善鈔』と『十王讚嘆修善鈔図繪』ではこの地獄に関する描写の後に、さらに阿弥陀の来迎に関する描写を増補する。この増補部分では、まず来迎の根拠である阿弥陀の四八大願が示され、次いでその大願によって墮地獄から一転して極楽へ迎え入れることになった人物の説話、念仏行者への阿弥陀の来迎と浄土の様子が連想形式によって並べられる。これらの記述は基本的には相互に独立した関係にあるが、地獄の描写以降をうっかり読めば、読者は次のような一連のストーリーを見いだしてしまうに違いない。すなわち五道転輪王の裁判を終え、地獄を下って行く亡者がいたが、阿弥陀が大

願を發し、亡者を地獄から救済し、阿弥陀聖衆の来迎によって、浄土へ迎え入れられた、という一連のストーリーである。しかもどうやらテクストの作者自身、読者にそうした錯覚を期待してした可能性が強い。というのも例えば『十王讚嘆修善鈔』阿弥陀来迎（極楽の情景）のくだりで、極楽における生活のすばらしさに感嘆した行者が、

「昔炎魔の庁庭に禁られて、鎮に呵嘖の語を聞て、陳方舌を巻し悲、今は弥陀の宝前に跪きて、親子憐愍の語ひを蒙て、歡喜身に余悦ひ今情思比に何計の違そや」（下二七ウ）

と独白するのだが、「昔炎魔の庁庭に禁られて」と彼が言うような事實はこのテクストには記されていないのである。これは明らかに本来それぞれ独立して描写されたこのテクストの末尾の部分で、全体を通して一連の過程として錯覚させようとする、テクスト作者のアクロバティックな作為を示したものと見えよう。

思うに十王思想にあつては十王による裁判は亡者の六道転生に先行し、六道思想にあつては六道は亡者がそのうちのいずれか一つに転生すべき所であつたはずである。しかしこのテクストの作者は十王の裁判に並行して、複数の地獄を経て極楽へと亡者に六道を巡りわたら

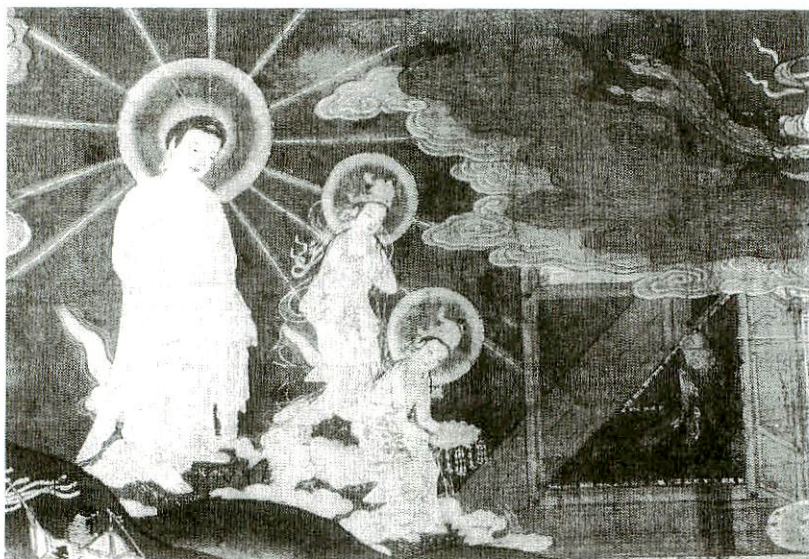


図3 出光美術館本六道絵第6幅部分 阿弥陀来迎

せようという意図をもっていたと思われる。そうした作者の意図と矛盾する『地藏菩薩発心因縁十王経』を前提としたうえでその意図を実現しようとするれば、当然このように前後の因果関係を明示せず配列順序によって暗示するにとどめるという手法に頼らざるを得なかっただろう。『十王讃嘆修善鈔』や『十王讃嘆修善鈔図絵』の作者は、十王思想における『地藏菩薩発心因縁十王経』の権威を利用しつつ、あらたな他界観を構築しようとしていたとみてよからう。

彼らが構築しようとしていた他界観は近世の六道十王図において完成する。室町時代の出光美術館本六道絵では十王の裁判と並行して六道の情景が描かれ、最後の第六幅に阿弥陀来迎が描かれ、六道巡りをした亡者が最終的に阿弥陀によって救済されたかのような印象を与える構成をとる。しかしここでも注意深くみると、阿弥陀の来迎を受けているのは念仏行者であり、亡者ではない(図3)。すなわち、出光美術館本にあっても『十王讃嘆修善鈔』や『十王讃嘆修善鈔図絵』と同様に、悪道をめぐるりわたった後に極楽へと向かう図式を関連づけたい図像同士の併置という形で辛うじて実現しているのである。近世初期に制作された長岳寺本六道十王図<sup>10)</sup>ではこの構造はもっと積極的に主張される。長岳寺本では『地藏菩薩

発心因縁十王經』に基づく死後の道行きの描写に始まり、十王の裁判と並行して『往生要集』に基づく六道世界を順次下って行く過程が描写され、阿鼻地獄に到達するや一転して阿弥陀聖衆の来迎に出会い、阿弥陀浄土を遠望する、という構成が明確に打ち出される。こうした六道十王図にあって、さきに論じた転生説話や蘇生譚といった六道世界の移動にかかわる説話の図像は、単に併置されただけであった図像と図像を結び付け、構成にみられるこのような流れを強調する役割を担っているのである。さらに長岳寺本では阿弥陀の来迎を受けるのもはや念仏行者ではなく亡者となり、もはやこの流れはいかなる隠蔽をも伴わない明白なものとして提示されていることが分かる。

### おわりに

以上、本論では『十王讚歎鈔』『十王讚嘆修善鈔』『十王讚嘆修善鈔図絵』の三つのテクストがそれぞれ増補の関係にあること、それらは『地藏菩薩発心因縁十王經』を前提としながらも新たな他界観を形成しようとしていたこと、そしてその新しい他界観の形成は六道十王図をはじめとする美術においても並行してなされていたこと

を述べた。これらの事例にあらわれた他界観がどのような宗教思想を背景とし他の分野にどのような影響を及ぼしていったのかについての全体像の解明は今後の研究課題としなければなるまい。

### 注

(1) 六道十王図とは筆者が暫定的に命名した用語で、六道絵と十王図の組み合わせによってできたものをさす。用語の初出は鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王図」(『仏教芸術』二〇三号 一九九二年)、その定義については鷹巣純「めぐりわたる悪道―長岳寺本六道十王図の図像をめぐって―」(『仏教芸術』二二一号 一九九三年)を参照されたい。

(2) 『昭和定本日蓮聖人遺文』第三卷(一九五四年 総本山身延久遠寺)で三宝寺藏本が活字化されている。以下、本論で『十王讚歎鈔』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。

(3) 国会図書館に享保六年(一七一六)刊の二巻本の版本が所蔵されている。以下、本論で『十王讚嘆修善鈔』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。

(4) 筆者架蔵中に嘉永六年(一八五三)再彫の三巻本の版本がある。以下、本論で『十王讚嘆修善鈔図絵』に関して引用・言及する場合はすべてこれを典拠とする。

(5) 『十王讚歎鈔』で死出の山・三途川・懸衣孃・光明院・俱生神・都弔王と呼ばれるモチーフが、『地藏菩薩發心因縁十王經』では死天山・奈河津・奪衣婆・光明王院・同生神・都市王と呼ばれているなど。

(6) 『地藏菩薩發心因縁十王經』において閻魔王宮に属するとされていた壇荼幢・同生神が、『十王讚歎鈔』では前者は初江王宮にも存在し、後者は宗帝王宮にも存在するなど。

(7) 「此讚歎鈔は愚痴無智の道俗男女を勸か為に去ぬる応永廿五年之旧本に詞を添削或は經論伝記等の文言を引載て令集記畢。然を今重て写之者也。」(『十王讚嘆修善鈔』下二八ウ)

(8) 実は本地仏の九番目を勢至菩薩とするのはすでに『十王讚歎鈔』にみられるが、同書では十番目を阿弥陀ではなく釈迦とする。この変更により本地仏は阿弥陀三尊を構成せず、阿弥陀の脇侍として以外の特性をほとんどもない勢至を本地仏の一つとする理由が不明確になる。また釈迦はすでに初江王の本地仏として挙げられていて重複しており、本地仏の構成自体に無理が生じる。本地仏に阿弥陀三尊を組み込むという発想は全く同じ組み合わせで正嘉元年(一二五七)の『私聚百因縁集』にすでにみられ、また鎌倉時代の十王表現における本地仏の半数以上、南北朝時代以降の十王表現における本地仏のほとんどに共通しており、本地仏の構成の主流は『十王讚嘆修善鈔』系諸本と六道十王図(鷹 巢)

修善鈔』の側にあったことがわかる。したがって『十王讚歎鈔』にみられる無謀な本地仏構成の背景には、今は失われてしまったものの『十王讚歎鈔』に先行するテクストが浄土信仰の系列にあり、それを日蓮宗の側が慌ただしく改変したという実状が推測される。日蓮宗としては先行するテクストにあった阿弥陀信仰の匂いを、法華經の教主である釈迦によって消したかったのであろう。なお『十王讚嘆修善鈔』の本地仏構成はこの『十王讚歎鈔』に先行するテクストのものを反映していると考えてよからう。

(9) 「さしも苦心に種々の法門を説給、万差の根機にあておき給へるぞかし、其をば更に余処にみて徒に三途に沈まんは浅猿き事には非ずや」(『十王讚嘆修善鈔図絵』中二オ)

(10) 特別展図録『中性庶民信仰の絵画 ― 参詣曼荼羅・地獄絵・お伽草子―』(渋谷区立松濤美術館 一九九三年)に全幅のカラー図版が掲載されている。

(11) 『十王讚嘆修善鈔図絵』に、制作者も分からない地獄の釜が果たして実在するのかという問答説話が出ていますが、その実在の証拠としてこの郭巨が掘り当てた金の釜が実在することが挙げられている。郭巨の釜が実在するかを検証もないこの証明は暴論と言わざるを得ないが、地獄の釜と郭巨の釜というとりあわせが生まれたきっかけは、あるいは六道十王図にしばしば郭巨の釜が描かれ、



- 人々が両者を一緒にみる機会が多かったことに由来して  
いるのかも知れない。出光美術館本でも郭巨はまさに金  
の釜を掘り当てたところで、土中から釜が半ばのぞいて  
いる様が描かれるが、その一方で第三幅では観音の法力  
によって炸裂する地獄の釜が描かれている。
- (12) 奈良国立博物館編『仏教説話の美術』（思文閣出版 一  
九九六年）に全幅のカラー図版と細部図版が掲載されて  
いる。
- (13) 菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」（『仏教芸術』一  
七五号所収 一九八七年）によれば他に後述する目連救  
母説話と内容不明の説話一種が図像化される。極楽寺本  
に採り上げられた五つの説話はいずれも蘇生説話であり  
厳密な意味では転生説話とは異なるが、蘇生説話とは悪  
業の結果悪道へ墮ちるべきところを救われて蘇生する  
人々の説話であり、悪業が人間を悪道に導くという根幹  
部分においてふたつの説話類型は共通する。そして本論  
で採り上げた三つのテクストや六道十王図においては、  
こうしたある世界から別の世界への移動という観念こそ  
が重要であったと思われる。
- (14) 例えば極楽寺本六道絵ではこの説話をめぐって五場面が  
図像化されるし、長岳寺本六道十王図では二場面が選択  
され図像化される。そして阿鼻地獄における母子の出会  
いの一場面のみを採り上げたものまで含めれば禅林寺本  
十界図・水尾本六道十王図・出光美術館本六道絵など主
- 要な六道十王図をほとんど網羅し得る。六道十王図にお  
けるこの図像の機能については鷹巣純「目連救母説話図  
像と六道十王図」（『仏教芸術』二〇三号所収 一九九二  
年）で考察した。
- (15) 真保亨「地獄絵」（毎日新聞社 一九七六年）に全幅の  
カラー図版が掲載されている。
- (16) 湧雲に乗じ合掌して虚空へ去る唐装の女性は、極楽寺本  
六道絵においては昇天する目連の母、興聖寺本紺紙金字  
法華経においては成仏する竜女として描かれるが、浄福  
寺本では鳥居とともに描かれることもあり、これを昇天  
の図像と捉えることが妥当と思われる。
- (17) 中野玄三「六道絵の研究」（淡交社 一九八九年）にモ  
ノクロ図版が掲載されている。
- (18) 特別展図録『閻魔登場』（川崎市民ミュージアム 一九  
八九年）に全幅のカラー図版が掲載されている。
- (19) 「十王讚嘆修善鈔図絵」においても同所は「昔十王の庁  
に禁られて、呵責の語をき、申訳に舌を巻し悲み、今  
は弥陀の宝前に跪ぎて、親子憐愍の語ひを蒙りて、歡  
喜身に余る喜びを今情思ひ比ぶるに何計の違ぞや」（下  
四四ウ）とほぼ同様の表現をとる。
- (20) 鷹巣純「めぐりわたる悪道 一長岳寺本六道十王図の図  
像をめぐって」（『仏教芸術』二一一号所収 一九九三  
年）に全幅のモノクロ図版と考察がある。
- (21) こうした他界観が何に由来するのかを分析する余裕は本

論にはないが、山中他界観との関係は念頭に置かれるべきであろう。

〔付記〕 本論は鹿島美術財団平成八年度「美術に関する調査研究の助成」による研究成果の一部である。